

遠藤 志津子, 奥窪 宏太

TOPPAN株式会社  
情報コミュニケーション事業本部  
文化事業推進本部

Fourth Interview

4

“Further invigorate for the business of the cultural sector by matching the cultural value of art and museums with the alignment of social needs and technology can lead to the creation of a richer culture.”

アートやミュージアムの文化的価値と、社会ニーズとテクノロジーがマッチすることで、文化業界のビジネスも一層活性化でき、より豊かな文化を作り出すことにつながります。

#### Fourth Interview

4

Guest.

## Shizuko Endo, Kota Okukubo

遠藤 志津子, 奥窪 宏太

TOPPAN株式会社  
情報コミュニケーション事業本部  
文化事業推進本部

Interviewer.

北村 麻菜

国立アトリサーチセンター社会連携促進グループ

## イントロダクション

**北村** こんにちは。国立アトリサーチセンターの北村です。本日は第4回のゲストとして、TOPPAN株式会社の遠藤志津子さん、奥窪宏太さんにお越しいただきました。今日のご出演いただきありがとうございます。

**遠藤, 奥窪** よろしくお願いたします。

## TOPPAN の目指す持続可能な文化事業

**北村** TOPPANさんはミュージアム(美術館・博物館)といった文化セクターとのお仕事を特徴的な事業として展開していらっしゃいます。

**遠藤** 弊社は1900年創業の印刷会社を母体に、120年にわたって出版物や金融証券、パッケージなどの印刷物の表現や再現の面で最先端の技術を追求して参りました。1980年代から普及し始めたDTPの導入により、視覚表現技術のデジタル変革にも積極的に取り組み、そうしたなかで高品質・高精細な画像処理やカラーマネジメントといった技術も培って参りました。

**奥窪** デジタルの時代に入り、弊社は多くの事業領域を持

つなかで、文化財のデジタル化にも早期から取り組んでおります。時間や空間の制約にとられないデジタル技術の特徴を生かし、1990年代から文化財に特化したデジタルアーカイブやそのデータの公開手法に関わる専門部門を立ち上げ、現在に至っております。

なかでもフラッグシップ事業として、「トッパンVR」という文化財の精緻なデジタルツインの制作公開に1990年代後半から取り組んでおります。その事業を起点にVR、AR、メタバースなど、デジタルで表現されたコンテンツを「デジタル文化財」と位置づけて、それらを活用した展示、研修や観光、コンテンツ利用のライセンス事業などへと拡張しています。

**北村** 先ほど文化財のデジタルアーカイブや公開に関わる専門部署があるとお伺いしましたが、企業として人とお金という貴重なリソースを文化やアートに投入することについて、もう少しお伺いできますでしょうか。

**奥窪** 弊社には多岐にわたる事業領域がありますが、多くの人に知識や情報を伝え、より豊かな文化を作り出すという共通点があり、それは企業理念にも明文化されております。その社風が文化財に特化した事業部門の誕生の背景にあるのかなと思います。

**北村** ミュージアムや劇場などの文化施設をはじめ、文化やアートに直接関わるような仕事は多くありませんよね。

TOPPANさんのなかでも文化事業をやってみたいと思われる方は多いんじゃないでしょうか。

**奥窪** たしかに、文化に特化した部門は社内でも非常に人気が高く、特別視される傾向もあります。ピンポイントでこの部署を希望する新入社員もいると聞いています。

**遠藤** 少し誤解されることもあるのですが、われわれの取り組みが目指しているのはメセナ活動ではございません。文化セクターのみなさまにとっても弊社にとっても持続可能な事業モデルを目指しています。

多くの文化関連の取り組みが行政予算や寄附に依存している現状を踏まえつつ、現代社会におけるアートやミュージアムを有効活用し、研究者のみなさまのご協力を得ながら、文化的価値と社会ニーズ、そしてテクノロジーをマッチングさせて文化業界のビジネスを一層活性化させることが課題だと考えております。われわれはその課題に対して、解決のための役割の一端を担うことができると考えています。

**北村** TOPPANさんは数多くの事業を展開されていますが、そのなかでも特色としてアピールできる部署があれば、人材獲得やブランディングにも役立つのではないのでしょうか。そこに文化やアートが何か役立てているとしたら、私たち文化セクターの側としても、双方持続可能な関係を築いていくうえで本当にありがたいことです。

## 展覧会事業という事業領域の拡張

**北村** 私たち国立美術館も、TOPPANさんとの協業について、NCARの立ち上げにともなって現在進行形でお話をさせていただいているところです。

**奥窪** NCARさんのような組織が増えて、従来のミュージアムの保存・研究・公開の活動がさらに拡張され、多岐にわたる取り組みが行われるようになっていとお見受けしております。それによって弊社のような取り組みが活用される機会がより増えていくのではないかと感じております。

**北村** 最近では新規事業のひとつとして展覧会を主催されていらっしゃるようですが、これはどういった経緯があったんですか。

**遠藤** これまでは文化セクターのみなさまと共同で文化事業を行ってききましたが、世の中の価値観や技術の変化が目まぐるしいなかで、新しい文化財の楽しみ方について弊社なりの提案もしていきたいと考えるようになり、展覧会主催事業も手掛けるようになりました。

**奥窪** きっかけになったのは、2021年に東京ミッドタウン・ホールで開催した「北斎づくし」\*という展覧会です。膨大な北斎漫画のコレクションを所有する浦上満氏にコレクション



をお借りして、北斎漫画全15巻の全ページを一挙に公開するという、前代未聞の企画展でした。実物の展示に加えて全ページの高解像度アーカイブデータを活用し、展示会場の装飾に北斎漫画を超拡大したビジュアルを駆使したり、「北斎がもし現代に生きていたら」というコンセプトで、北斎漫画のエッセンスを詰め込んだデジタル展示も制作・公開を行いました。さらに、コロナ禍で来場が叶わない方にも楽しんでいただくために、展示会場をアーカイブしたバーチャル展示空間も公開いたしました。弊社初の大型展覧会の主催でしたが、おかげさまでリアル会場もバーチャル会場も、多くのお客様にご来場いただくことができました。

**遠藤** 2022年には東京国立博物館で、北京の故宮博物院の所蔵品のアーカイブデータを全面活用した「**故宮の世界**」展\*というデジタル展示イベントも開催しました。弊社と故宮博物院様は2000年より故宮の宮廷建築群などの豊富な収蔵品をデジタル化し、それをVRコンテンツにする共同プロジェクトを進めておりまして、コロナ禍で実物を日本に運ぶことが不可能になってしまったという当時の状況の中で、プロジェクトの成果を生かすことができました。

**北村** コロナ禍によって、デジタルはミュージアムにとっても一気に身近になったと思います。デジタルを活用した新しい形の展覧会をTOPPANさんが中心になって開催されたことを意義深く思いますし、今までの蓄積が裏付けられた証だ

\*日中国交正常化50周年記念「特別デジタル展「故宮の世界」2022年7月26日～9月19日 東京国立博物館

と改めてわかりました。

**奥窪** デジタル資源化・コンテンツ化については、文化セクターなどご関係のみなさまにその有効性について十分にご理解を得ることが最初のハードルだと考えています。博物館法の改正など、世の中の流れによって一般的な意識も非常に変わってきたとも、そして弊社の長年の取り組みを通じてよき理解者が増えてきたとも感じております。東京国立博物館様や故宮博物院様においては、長年にわたって文化財のデジタル鑑賞手法についての共同研究のパートナーであったこともあり、実現できたことも多いと考えております。

**遠藤** デジタル展示の検討においては、過剰な演出をせず、ネガティブな印象を持たれないように、実物との相乗効果を最大限にすることを念頭に実施いたしました。デジタル展示にしか実現できないことの追求とのバランスには難しい点もあると感じております。

**北村** コロナだけではなく戦争も起こり、いわゆるVUCAの時代、予測困難な状況でミュージアムも事業を行っていかなくてはなりません。そのなかで展覧会に参画するというチャレンジに取り組んでいらっしゃるねらいをお伺いできますでしょうか。

**奥窪** コロナ禍の後押しで環境も人の意識も大きく変わ



©特別展「北斎づくし」/ 撮影：TOPPAN株式会社/ 葛飾北斎生誕260年記念企画 特別展「北斎づくし」(東京ミッドタウン・ホール 2021)





©故宮の世界/ 撮影: TOPPAN株式会社/ 日中国交正常化50周年記念 特別デジタル展「故宮の世界」(東京国立博物館 2022)

り、現場を訪問しなくてもオンラインであらゆることが疑似体験できるようになった一方で、現場でのフィジカルな体験価値も一層高まっているのではないかと考えております。

**遠藤** 価値観やテクノロジーがすごいスピードで変化するなか、文化財の新たな魅力を伝えるために、誰も体験したことがないような新しい技術やアイデアを活用した、多少実験的なアウトプットにもぜひチャレンジしていきたいと考えています。弊社も主催者として公開の機会を作り出すことで、新しい試みを提案しながら、アートやミュージアムの可能性を拡張するような試みに寄与することができればと思っております。

**北村** アートやミュージアムに対する強い思いをお聞かせいただきましたが、改めてTOPPANさんにとってアートやミュージアムがビジネスのスコープとなっている意義を教えてくださいいただけますでしょうか。

**奥窪** アートやミュージアムに期待される社会的役割は、今後ますます大きくなっていくと考えています。その価値をよりわかりやすく、より多くの人に感じていただけるように、文化セクターのご関係者、鑑賞者、そして技術開発の視点を融合させてミュージアムの活動の活性化に寄与していきたいと考えております。

**遠藤** アートやミュージアムを取り巻く事業を持続可能なモデルにすることでますます発展させていくというわれわれの夢に向かって、頑張っていきたいと思っております。

## 企業×ミュージアム

### 持続可能な事業モデルへの期待

**北村** それでは最後に、企業と美術館が連携することについてお伺いいたします。これまでミュージアムと数多くのパートナーシップを重ねてこられたTOPPANさんからご覧になって、美術館と企業が連携することで社会にどのような可能性を生み出すと思われますか。

**奥窪** 文化セクターのみなさまと企業とが協力して、持続可能な事業モデルを目指すことで、現代社会におけるアートやミュージアムの文化的価値と、社会ニーズとテクノロジーがマッチし、文化業界のビジネスも一層活性化できると考えています。そして、それがより豊かな文化を作り出すことにつながればと思います。

**北村** ありがとうございます。お話を伺いながら、「持続可能性」が今回のテーマかなと考えておりました。私たちの取り組みもうとしている社会連携事業についても、それは大事な軸と考えています。ミュージアムも現代的な社会課題に参画

する時代となり、企業と美術館が双方に連携して前向きに社会に対して向き合っていくことで、美術館の社会への関わり方を一つ一つ作っていったらと思っております。

今日は企業と美術館が継続的にパートナーシップを結んでいく形について具体的なお話をお伺いできました。企業と美術館の連携のあり方として、TOPPANさんは私たちに非常に近いフィールドでお仕事をされていますが、他の領域でも、1つでも多くの企業の方とそういった形を結べたらと考えております。

**遠藤** 社会連携促進グループの「美術館とさまざまな組織とのパートナーシップを通じて、美術館の可能性を拡張する」というミッションに強く共感を覚えています。より多くのみなさまに文化財の魅力を感じていただけるよう、それぞれの知見や技術、思いを掛け合わせ、鑑賞される方、文化セクターのみなさん、そしてわれわれも含めて全員にメリットがある新たな取り組みをぜひ一緒にさせていただければと思います。

**北村** 非常に心強いです。本当に今日はありがとうございました。

**遠藤, 奥窪** ありがとうございました。



“Now museums are actively seeking to engage with contemporary social issues, we aim to build our involvement in society through collaboration between corporations and museums.”

#### Profile.

遠藤 志津子

事業開発部 部長。1999年、現TOPPAN株式会社入社。入社以来、日本国内外の文化財、美術品等を主題としたデジタルアーカイブ、デジタルコンテンツの企画、制作、公開、活用事業を推進する。

奥窪 宏太

コンテンツ企画部 課長。2008年、現TOPPAN株式会社入社。得意先企業向けのブランドコンサルティング職を経て、2010年より文化事業推進本部に所属。ミュージアムとの共同プロジェクトの活動を軸に、文化財のデジタルアーカイブデータの活用事業を推進する。

美術館も現代的な社会課題に参画していこうとする今、企業と美術館が連携することで社会への関わり方を一つ一つ作っていきたいです。